

産学連携専門職を対象とした個別研修における 研修報告書に着目した課題抽出

Identifying issues on trainees' reports of individual training programs for professionals in
industry-academia collaboration

宮下和子^{*1} 合田美子^{*1,2} 久保田真一郎^{*1,2} 平岡斉士^{*1,2}
Kazuko MIYASHITA Yoshiko GODA Shin-Ichiro KUBOTA Naoshi HIRAOKA

^{*1}熊本大学大学院社会文化科学教育部教授システム学専攻

^{*2}熊本大学教授システム学研究センター

^{*1}Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University

^{*2}Research Center for Instructional Systems, Kumamoto University

＜あらまし＞ 2019 年度から実施されている産学連携専門職を対象とした 1 対 1 個別研修の改善を目的として、研修報告書のレビュー及び研修修了生へのインタビュー調査を実施した。その結果、研修の振り返り支援（課題 a）、研修目標の設定の支援（課題 b）、研修報告書への記述の負担感への配慮（課題 c）、研修成果の見える化（課題 d）の 4 点の課題が抽出された。

＜キーワード＞ 個別研修、専門人材教育、インストラクショナルデザイン、研修目標

1. はじめに

大学等における研究成果を産業界へ橋渡しする専門職が定着しつつあるものの（二宮ら 2017）、その広範な専門業務に従事する専門人材育成は各組織で十分に行われているとは言い難い。筆頭著者の組織では、各大学における産学連携業務に従事する専門人材の専門能力向上を目的とし、2019 年度より個別研修を実施している。本研修は、産学連携業務の実務経験豊富なエキスパートが指導者となり、研修開始（時期は研修生ごとに異なる）から翌年 2 月までを研修期間とし、期間中は研修生の実務に即して個別指導を行う。

2. 目的

本研修は実施開始後 1 年を迎えたばかりであるため、初年度実施の内容を振り返り、改善点の抽出及び次年度への反映が必要である。

本研究では、改善点抽出のために、実施事例を調査し、特に研修報告書の改善点に着目して課題点を抽出することを目的とする。

3. 方法

研修報告書のレビュー及び研修に参加した研修生へのインタビューを実施した。

3.1 研修報告書のレビュー

本研修に参加した全 6 名の研修報告書の記述を確認した。研修報告書は Excel シート 1 枚で構成されており、研修生が記述する項目は表 1 の通りであった。

表 1 研修報告書の研修生が記述する項目

研修開始までに記述	研修期間中に記述	研修終了後に記述
実務問題 研修目標 達成基準 課題設定 希望する指導者	毎月の予定 毎月の実績	研修結果 自己評価 達成度 (4 段階評価)

この研修報告書には、研修生が記述する項目以外に指導者が記述する項目も含まれており、研修開始前～終了後までこの 1 枚のシートを軸として研修が進められた。指導者が記述する項目は、達成度評価及び受講者へのコメントの 2 つで、共に研修終了後に記述されていた。

本研究では、これらの項目の内、表 1 の研修生が記述する項目を中心にレビューを行った。

3.2 研修参加者へのインタビュー

研修参加者全 6 名のうち 3 名に対し、電話または Web 会議システムを用いて 1 対 1 の半構造化

インタビューを実施した。インタビュー項目は事前に送付し、45分～1時間インタビューを実施した。

表2 研修参加者へのインタビュー項目

研修全般	・研修に対する全体的な感想 ・本研修ターゲット層とは ・指導者の選び方 ・指導者とのコミュニケーション状況 ・その他本研修に対するご提案など
研修成果	・この研修での最大の学びとは ・研修成果の自組織内展開状況 ・研修成果の蓄積方法
研修報告書	・研修報告書で使いづらかった点 ・研修課題の設定について

4. 結果と考察

研修報告書のレビュー及び研修参加者へのインタビューから、4つの課題点、研修の振り返り支援（課題a）、研修目標の設定の支援（課題b）、研修報告書への記述の負担感への配慮（課題c）、研修成果の見える化（課題d）が抽出された。

4.1 研修報告書のレビュー

表1の項目のうち、研修期間中の記述に着目すると、毎月の予定については、全6名が「面談〇時間」といったスケジュール予定の記述であった。また毎月の実績については、6名中5名が「（面談場所）において〇時間面談」といった研修実施証拠としての形式的な記述に留まっていた。1名のみ、研修テーマに関して検討したこと、調査したこと等の内容記述が見られた。よって、少なくとも5名に関しては、研修報告書は事務連絡のみに使用されており、研修内容の省察ツールとしては使用されていないことがわかった（課題a）。

また、表1にある通り、研修開始までに、研修の目標設定に関する類似項目3つ、研修目標・達成基準・課題設定を記述することになっているが、報告書をレビューすると、記述内容が項目をまたいで長文で混在しているもの、研修目標及び達成基準が「〇〇を作成する」「〇〇を修正する」「〇〇案を固める」など criteria がどこかわからないものが多く散見され、これら3項目について、記述が不明瞭であった。よって、この3項目について、項目の精査及び明確な目標設定のための支援策を提示する必要がある（課題b）。

4.2 前年度研修参加者へのインタビュー

表2の項目を中心とした3名へのインタビュー結果から、研修報告書に関する項目を中心に検討を行った。

研修報告書で使いづらかった点は、予定と実績を書く欄がわかりにくいという点が挙げられ、これは、シートを色分けするなど容易に対応可能な項目であった。また、研修課題の設定については課題bへとつながるが、特に産学連携業務の経験が浅い研修生からは、課題を設定すること自体が非常に困難だったとのコメントがあった。つまり、本研修では、学内発明を起点とするその後の一連の技術移転の流れを把握していないと目標として置くべき業務内容の見通しが立たず、目標設定の段階から指導者の支援が必要であった。また、達成基準の不明瞭さから終了後の達成度の評価に迷ったとのコメントもあり、改めてヒアリングからも課題bの重要性が示唆された。

その他の点として、報告書の分量がExcelシート1枚より多くなると業務時間に差し障る懸念や、モチベーションを維持できないなどネガティブな印象が見いだされた。よって、業務時間への侵食に配慮した記述負担を考慮する必要が見い出された（課題c）。

また、課題aでも触れたが、個別研修で何を学び次の実践にどう活かしていくか、という研修成果の中身が報告書から見えない点について、研修成果の蓄積方法をヒアリングで確認したところ、どの研修生も各自でメモを残しているとのことだった。現行の研修報告書では、このような各研修生の学習プロセスが可視化されていないため、研修成果の見える化対策を研修報告書に施す必要がある（課題d）。その他、学習方略についても、現状では研修生同士で共有化できておらず、研修を有効に活用している研修生の事例を共有化できるような仕掛けを今後検討していきたい。今後以上の課題について対応する予定である。

5. 参考文献

二宮 祐, 小島 佐恵子, 児島 功和, 小山 治, 濱嶋 幸司 (2017) 高等教育機関における新しい「専門職」：政策・市場・職能の観点から, 大学教育研究ジャーナル 14号, 徳島大学, pp.1-20